

## 美術の表現・技法・材料に関する多角的研究 (①企04-14-4/5)

### 目 的

本研究は彫刻や絵画といった様々な美術作品を構成する材料やそこに用いられた技法、ひいては表現、その制作過程、作品の成り立ち、生成されてから今日に至ったか、それがどのように受容されてきたか等を、関連書分野と連携しながら多角的に分析し、現在目の前にある「作品」ないし文化財に対するより深い理解を形成することを目的としている。

### 成 果

#### 1. 作品・関係資料の調査・研究

今年度は以下の各機関・所在地にて各種の文化財を調査または研究を実施した。

ア) 東京国立博物館 国宝孔雀明王像

イ) 龍谷ミュージアムでの光照寺所蔵一流相承系図(絵系図)ほか調査

ウ) 鶴見大学文学部文化財学科との朝鮮螺鈿漆器の共同光学調査

エ) 東京国立博物館所蔵国宝普賢菩薩像について高精細画像をもとに東京国立博物館との研究会

オ) 鶴見大学・目白漆芸研究所との研究協議と意見交換、新たなデータベース作成に関する所内研究協議

#### 2. 彩色関係データベース(語彙・史料編)の公開及び研究所所蔵ガラス乾板のデジタル化

美術工芸品の彩色で重要な、史料上の関係語彙と使用例の総覧を目的に彩色関係資料データベース(語彙・史料編)について、これまで実施してきたデータ校訂・更新を終了し、全データのウェブサイトでの公開を行った。

また昨年度より開始した研究所が所蔵する戦前から戦後にかけての美術作品を写した20,000枚を超えるガラス乾板について、今年度も引き続き透過光撮影法によるデジタル化作業を実施、画像整形と目録文字情報の補訂を行った後、研究所ウェブサイトにて2,759件のデータを新たに公開した。

#### 3. 寄贈資料の整理

前中期計画に引き続き今年度も表現技法材料研究と特に関わりの深い秋山光和旧蔵画像についてスキャン作業を終了し、公開に向けたデジタルデータの整理作業を実施した。

### 論文

・小林公治「2013年開催の南蛮漆器に関する展覧会から—Lucas Namban (マドリード) と「伊達政宗の夢」展(仙台)』『美術研究』413号 東京文化財研究所 pp.43-51 14.10

・小林達朗「美しい術—国宝千手観音像の場合」『文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「かたち」再考—開かれた語りのために—』東京文化財研究所 pp.143-156 14.12

### 発表

・小林公治「琉球王国時代の螺鈿漆器製作技術を探る」、「トルコの螺鈿—本格調査に向けた予備的検討—」、「パレスチナの螺鈿—その特徴と歴史に関する予察—」第5回琉球の漆文化と科学 ポスター発表 14.11.15

・小林公治「南蛮漆器書見台編年試論」企画情報部研究会 東京文化財研究所 14.12.9

・小林達朗「東京国立博物館蔵 国宝・普賢菩薩像の表現—附論 仏画における「荘厳」」企画情報部研究会 東京文化財研究所 14.12.9

### 研究組織

○小林公治、田中淳、山梨絵美子、塩谷純、津田徹英、二神葉子、小林達朗、皿井舞、安永拓世(以上、企画情報部)、江村知子(文化遺産国際協力センター)、中野照男(客員研究員)